

26 . ところで、その六か月目に、御使いガブリエルが、
神から遣わされてガリラヤのナザレという町のひとりの処女のところに来た。

27 . この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリヤといった。

28 . 御使いは、はいつて来ると、マリヤに言った。

「おめでとう、恵まれた方。

主があなたとともにおられます。」

kai. eiselqwn proj authn eipen(

Caire(kecaritwmenh(

o` kurioj meta. sou

29 . しかし、マリヤはこのことばに、ひどくとまどって、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ。

h` de. epi. tw/ logw| **diataracqh**

aor. pass. *greatly disturb, perplex,*

throw into great confusion

kai. **dielogizeto** potapoj eih o` aspasmoj outoj

(1) as reasoning inwardly *think about thoroughly, consider carefully, reason out* (LU 1.29);

(2) as reasoning w. others *discuss, argue, debate* (MK 9.33).

30 . すると御使いが言った。

「こわがることはない。

マリヤ。

あなたは神から恵みを受けたのです。

31 . ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。

名をイエスとつけなさい。

32 . その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。

また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。

33 . 彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。」

kai. eipen o` aggeloj auth|

Mh. fobou(

Mariam(

eurej gar carin para. tw/ qew|

31 kai. idou. sullhmyh| en gastri.

kai. texh| uion

kai. kaleseij to. onoma autou/ Vhsouh

32 outoj estai megaj

kai. uiòj uyistou klhqhsetai

kai. dwsei autw/ kurioj o` qeoj ton qronon Daid tou/ patroj autou(

33 kai. basileusei epi. ton oikon Vakwb eij touj aiwhaj

kai. thj basileiaj autou/ ouk estai teloj

34 . そこで、マリヤは御使いに言った。

「どうしてそのようなことになりえましょう。

私はまだ男の人を知らないのに。」

eipen de. Mariam proj ton aggelon(

Pwŷ estai touto(epei. andra ouwginwskwÈ

fut.

35 . 御使いは答えて言った。

「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。

それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。

36 . ご覧なさい。

あなたの親類のエリサベツも、あの年になって男の子を宿しています。

不妊の女といわれていた人なのに、今はもう六か月です。

37 . 神にとって不可能なことは一つもありません。」

35 kai. apokriqeiŷ o`aggeloiŷ eipen authŷ(

Pneuma aŷion epeleusetai epi. se, kai. dunamij uyistou episkiasei soi .

dio. kai. to. gennwmenon aŷion klhqhsetai uiòŷ qeouÅ

36 kai. idou.

Elisabet h` suggenij sou

kai. auth. suneiŷhfen uiòn en ghrei authŷj

kai. outoiŷ mhn ektoj estin authŷ/ thŷ/ kaloumenhŷ/ steiraŷ).

37 oŷti ouk adunathsei para. tou/ qeou/ pah rhmaÅ

38 . マリヤは言った。

「ほんとうに、私は主のはしためです。

どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」

eipen de. Mariam(

Idou h` douŷh kuriou .

genoito moi kata. to. rhma, souÅ

こうして御使いは彼女から去って行った。

kai. aphŷqen apV authŷj o`aggeloiŷÅ

説教

これは天使から受胎告知をされた時のマリヤの応答です。

このひと言で、マリヤは信仰深い女性の模範であると時代を超えて賞賛されるようになりました。

勿論、他にもマリヤはいくつかの場面で登場します。

例えば、

直後にエリサベツの家を訪問した際に讃歌を歌う場面、

イエスさまを出産した夜の場面、

生まれてまもないイエスさまを神殿に連れて行く場面、

十二才のイエスさまがエルサレム神殿で迷子になったとあって懸命に探す場面、

ガリラヤのカナでの婚礼の場面、

イエスさまが「気が狂った」という噂を聞き、心配になって会いに来る場面、

イエスさまが十字架で死なれる姿を見届ける場面、

そして聖霊が降臨する前、

他の百二十人ほどの弟子たちと共に集まって心を合わせて祈りに専心している場面に、マリヤが登場します。

でも、マリヤの人柄と信仰を最も単純に表現しているこのひと言、

「ほんとうに、私は主のはしためです。

どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」

この言葉こそが時代を超えて人々に大きな感動と感化をもたらした言葉と言えるでしょう。

この後訪問した先のエリサベツは、マリヤのあいさつを聞くなり、

「子が胎内でおどり」、「聖霊に満たされ」、「大声をあげて」こう言いました。

「あなたは女の中の祝福された方。

……主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。」(42-45)

「あなたは女の中の祝福された方」とはアラム語的な言い回しで、

「あなたは女という女の中で最も祝福された方」すなわち「世界一祝福された女性」という意味です。

しかも「何と幸いなことでしょう」という表現も、「これ以上ない最高の幸せさ」を表現する言い方です。

つまり、エリサベツが見る時、マリヤは特別に世界一祝福されて幸せな女性と言うことができるのでした。

どうしてエリサベツは、マリヤが世界一祝福されて幸せな女性だと思ったのでしょうか。

勿論、それは救い主イエスキリストさまの母に選ばれたからですが、

でも、それよりも、

エリサベツがここでマリヤが幸いだと評価している最も大切な理由は

マリヤが「主によって語られたことは必ず実現すると信じきった」からです。

「信じきる」とは、ただ単に何とはなしに漠然と信じるといった程度のことではありません。

そうではなく、
「疑いが全くない」とか、
「100%そのまま信じる」、
「完全な信頼を寄せている」といった意味となり、
マリヤが天使のお告げを少しも疑うことなくそのまま受け入れ、
100%神さまを信頼しきって、安心していた、ということがわかります。

このようなマリヤであればこそ、
自分が人類待望の救い主を身ごもって出産するようになるという
全く信じがたい神さまの約束を天使から聞いた時、
冒頭のように
「ほんとうに、私は主のはしためです。
どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」と告白することができたのでした。

「ほんとうに、私は主のはしためです。」
この直訳は、「**見てください、（私は）主の奴隷です。**」です。
しかも、奴隷の中でも最下層の奴隷だと告白しているのです。
新約聖書には「しもべ」「奴隷」を意味する言葉がいくつか登場します。
例えば、「仕える者」を表す「ディアコノス」、
元来は「子供」を表す「パイソ」、
「住む」という意味のことばから派生した「オイケテース」（住み込み奴隷）
元来は「少女」を表す「パイディスケー」（使徒 16：16「女奴隷」）がそれです。
でも、ここでは、マリヤは自分のことを
「ドゥーロス」という、奴隷の中でも最下層の奴隷を表現する言葉を使って告白しているのです。

ですから、これは決して月並みの表現ではありません。
言葉のあやでこんなことを言っているではありません。
生半可な覚悟で言っているではありません。
「見てください、（私は）主の奴隷です。主のドゥーロスです。」
こう告白する時、マリヤは神さまへの絶対服従を誓っているのです。
「あっちへ行け。」と言われれば、あっちへ行きます。
「こっちへ来い。」と言われれば、こっちへ来ます。
「水の中に入れ。」と言われれば、喜んで入ります。
「死ね。」と言われれば、死にます。
それが「奴隷」なのですから、本当にいのちを賭けて主に従います。
そういう覚悟で
「ほんとうに、私は主のはしためです。」
「見てください、（私は）主の奴隷です。」
マリヤはこう告白しているのです。

しかし、この後の展開を見ていくと、
現実の問題として、マリヤは本当にいのちがけで主の召命に應えていかなければなりませんでした。

まず、婚約者のヨセフを抜きに子どもができてしまったら、
誰かと姦淫をして身ごもったのではないかと疑われて、律法によれば石打の公開死刑に処されてしまいます。
(申命記 22:23)

でも、実際には当時のユダヤ社会では死刑は執行されてはいませんでした、
そのような女性は、社会的に恥ずべき者としての烙印を押されて二度と結婚できなかつたと言われています。
それで、娘が姦淫により子を宿してしまった時、その父親は娘に「死んでほしい」とさえ思ったそうです。
ですから、マリヤの父は、社会的な面目を失って酷く苦しむことになります。

それに加えて、婚約者のヨセフもまたマリヤの妊娠を聞いてこれまた酷く苦しむことになります。
実際に、ヨセフも、天使から事情を聞くまでは、深く悩みながら「密かに離縁しようと決めていた」のです。

仮にこれらがクリアしたとしても、
マリヤはベツレヘムの家畜小屋でイエスさまを出産しなければなりませんでした。

しかも、産んで間もなくヘロデ王の刺客がイエスさまのいのちを狙って殺しにやって来ます。
それを逃れるため、エジプトに逃避しなければなりませんでした。

イエスさまが成長し、成人して、公生涯に入られるや、権力者からいのちを狙われ、
およそ三年間の宣教活動の後、最後はとうとう捕まって、十字架に磔にされて殺されてしまいます。
しかも、息子の十字架で死んでいく姿を「イエスの十字架のそばに...立って」見なければなりませんでした。

敬虔なシメオンという老人は、エルサレム神殿で、マリヤにこう言いました。
「剣があなたの心さえも刺し貫くでしょう。
それは多くの人の心の思いが現れるためです。」

ですから、
信仰の目をもって見れば、
人類の救い主の母となるということなので誰より幸いと言えるのですが、
でも、この世的に見れば、人間的な目で見れば、
本当にいのちを賭けて、決死の覚悟で主に従うというのでなければ到底従いきれないものでありました。

弱冠十二才の少女が果たしてそこまで理解していたかはわかりません。
誰も自分の未来は予測できないものですし、おそらくこの時のマリヤもそうだったと思います。
でも、たとえ幼い信仰であったとしても、
あるいは、自分の告白の意味がよくわかっていなかったとしても、この時のマリヤの告白は真実でありました。
その時はその時で、マリヤは幼いながら自分なりの精一杯の告白をしたのです。

「ほんとうに、私は主のはしためです。
どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」

「ご覧下さい。
見ての通り私は主の女奴隷にすぎません。
だから、自分の思いの通りにではなく、
あなたのおことばどおり私に実現しますように。」

マリヤはマリヤで、自分の考えがあったでしょう。
自分が予想し、希望して、思い描いた、自分の未来の人生設計があったことでしょう。

でも、マリヤはそれをいったん神さまに委ねました。
そして、自分の考えた通りになるのではなくて、
自分の主人である神さまのご計画の通りになるように、と告白したのです。

「自分の人生は自分のものなのだから、
悔いなく、自分の好きなように、自分勝手に生きさせてくださいよ、神さま。」と、
自分の欲求の実現とか自己実現を神さまに祈願したのではありません。
そうではなく、「あなたのおことばどおり」と、
自分が100%神さまのみことば通りに生きることを神さまに願い、祈ったのです。
この時マリヤは嫌なら断ることもできたでしょうが、そうしませんでした。
たとえどのような未来が待ち受けているとしても、
たとえ死ぬほどの苦しみや試練が待ち受けているとしても、
自分の勝手な願いの通りではなくて、「あなたのおことばどおり」と、
100%神のことば通りに生きることを、心から神さまに願ったのでした。

「ほんとうに、私は主のはしためです。
どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」

そして、今朝特に覚えたいことは、
こう祈って自分の人生を生きたマリヤこそが、
エリサベツの評価するように、「女の中の祝福された者」であるということです。
「女という女の中で最も祝福された女性」、「世界一祝福された女性」です。
「何と幸いな」、「これ以上ない最高に幸せな」、「特別に世界一祝福されて幸せな女性」なのです。
「これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう。」
こうマリヤ自身が言う通り、「時と場所を越えて、人類最高の幸せ者」なのです。

そして、マリヤの選択は最善でした。

マリヤの人生には常に大きな試練が立ち塞がりましたが、すべて神さまが解決してくださいました。

心配していた婚約者ヨセフには、神さまが説得してくださいました。

ヘロデにいのちを狙われた時には、天使が「エジプトに逃げろ」と教えてくれました。

エジプトへの逃避の費用は東方の博士たちが「黄金、乳香、没薬」を持ってきてくれて賄われました。

すべて神さまが助けてくださったのです。

最後には自分が腹を痛めて産んだイエスさまが

自分の目の前で十字架に磔にされて最も惨めに無惨に殺されます。

これは母親としては何より最も耐え難い試練であったと思われます。

でも、その最大の試練でさえ、神さまが解決してくださいました。

どうやってでしょうか？

イエスさまを復活させて、です。

死んだイエスさまがよみがえったのです。

よみがえって、肉体をとって復活して、弟子たちに四十日間現れ、五百人以上の弟子たちに現れました。

おそらく間違いなくマリヤにも現れたでしょう。

マリヤは、死んだけれども死からよみがえった自分の息子イエスさまを目の当たりに見たのです。

そして、そのままイエスさまは生きてままたんに挙げられていきました。

これ以上の幸いはあるでしょうか。

これ以上の祝福はあるでしょうか。

永遠のいのちを見たのです。

死に打ち勝って、よみがえって、天に挙げられていく、

来るべき新天新地、神の国の、天国のイエスさまを見たのです。

しかも、それは自分の息子でありました。

これは、まさに、時代を超え、場所を越えて、世界最高の祝福です。

人類最高の幸せ者です。

マリヤ自身が言う通り、あるいはエリサベツが言う通り、マリヤは確かに「幸せ者」なのです。

ただ、よく注意しなければならないことがあります。

それは、イエスさまを産んだマリヤは確かに幸せ者だけれども、

でも、聖書は、イエスさまを産んだからマリヤは幸せ者であるとは言っていないということです。

イエスさまを産んだからマリヤは幸いなのではなく、

「主によって語られたことは必ず成就すると信じ切った」から、幸いなのです。

マリヤに関して、イエスさまご自身が言及されているほとんど唯一の箇所があります。（ルカ 11:27-28）

それによると、次のようにあります。

「イエスが、これらのことを話しておられると、

群衆の中から、ひとりの女が声を張り上げてイエスに言った。

『あなたを産んだ腹、あなたが吸った乳房は幸いです。』

しかし、イエスは言われた。

『いや、幸いなのは、神のことばを聞いてそれを守る人たちです。』」

このイエスさまのみことばによると、

「イエスさまを産んだ腹」が幸いなのではなくて、

「神のことばを聞いてそれを守る人たち」が幸いなのです。

つまり、

「主によって語られたことは必ず成就すると信じ切った人」が幸いなのです。

「ほんとうに、私は主のはしためです。

どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」

このマリヤの信仰が幸いなのです。

マリヤは神さまを信頼していたおりました。

神さまは素晴らしいお方であると信頼していました。

神さまが自分を愛し、最善、最高の人生を自分に準備してくださっていることを信頼していました。

人間的に計算すると、

波瀾万丈の人生が待ち受けているかも知れない、

死ぬほどの苦しみが待っているかも知れません。

でも、マリヤは神さまを信頼しきっておりました。

そして、100%全幅の信頼を寄せて、安心しきっておりました。

これが信仰です。

神を信じる信仰です。

信仰とは、神さまを信じることです。

神の愛を信じることです。

神の最善を信頼することです。

信じて、委ねて、その御心に従うことです。

要するに、

「ほんとうに、私は主のはしためです。

どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」と心から喜んで告白することです。

私たちも同じではないでしょうか。

私たちにも神さまのご計画があります。

私たちの上にも、神さまの偉大なご計画があります。

何より罪から救って天国に入れてくださるという尊い約束があります。

全世界の祝福の基となるという約束があります。

その約束のものを手に入れるのに必要なのは、神のことばを信じることです。

神さまの恵みを受けるのに必要なのは、信仰です。

そして、信じる者は救われます。
信じる者は幸いです。
信じる者に、神さまの祝福があるのです。

どんなに目の前に苦難が待ち受けているように見えても、神のことばを信じるのが最善です。

祝福されています。
幸いです。

神さまが救ってくださいます。
神さまが助けてくださいます。
神さまが守ってくださいます。
神さまが祝福してくださいます。
神さまが永遠のいのちを与えてくださるのです。

神のことばに聞き従う道には苦難があります。

しかし、神のことばに、救いがあるので、
平安があります。
将来があります。
希望があります。
はかりしれない祝福があるのです。

マリヤのように、神のことばを信じる時、復活の主を見ます。

永遠のいのちを見ます。
イエスさまを通して、神を見ます。
神の国を見ます。
神の国に入ることができます。
最高の祝福にあずかることができるのです。

「ほんとうに、私は主のはしためです。

どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」

ここに集うみなさんひとりひとりが、
マリヤのように、神のことばを信じて、
神さまに祝福された、幸いな人生を生きて行かれるよう、主の御名により祈ります。